『社会科学ジャーナル』35〔1997〕
The Journal of Social Science 35〔1997〕

精神分析と政治理論
——ヴィルヘルム・ライヒの政治理論——

岡　﨑　晴　輝

I　序論

オウム真理教事件に明らかなように，新たな非合理主義の台頭が著しい。この事態を捉えることは，政治理論の必須の課題であるといわなければならない。しかしそのためには，「無意識の発見」によって人間の非合理的側面を解明し，我々の人間像に革命的な変革をもたらした，精神分析の業績を無視することはできない。たしかに，精神分析的な政治理論を構築した先駆者の一人，ハロルド・ラズウェルの業績については，それなりに継承されているといえる。しかし，フロイト左派の業績，特にヴィルヘルム・ライヒ(Wilhelm Reich, 1897-1957)の業績については，十分に継承されているとはいいがたい[1]。その背景には，ライヒが1960年代後半のニュー・レフト運動の挫折とともに忘れさられてしまったことがある。しかし，より根本的には，ライヒ自身の奇矯な生涯のため[2]，その理論が不当に軽視されていることがある。しかしライヒは，精神分析的な政治理論を構築し，非合理主義の問題と格闘していった先駆者の一人であり，その意味において，避けることのできない大きな遺産であるといわなければならない。本稿で我々は，ライヒの精神分析的な政治理論を可能なかぎり客観的に再構成し，我々の課題の端緒になるよう努めたい。

しかし，その過程で我々は，一つの困難にぶつからざるをえない。1930年代中頃を境に，ライヒが「政治」を否定していった事実である。この事実を納得のいくように説明することができなければ，前期ライヒの精神分析的な政治理論は単なる「逸脱」にすぎない，という解釈が起こりかねない。ポール・ロビンソンの『フロイト左派——ライヒ・ローハイム・マルクーゼ』(1969年)は，ライヒの性的・政治的ラディカリズムに注目した先駆的著作であるが，

しかし，この点に関するロビンソンの解釈は，納得のいくものではない。すなわち，ロビンソンは，前期の「政治」にたいする態度と後期の「政治」にたいする態度とは「両立しえない」とし，そうした変化の原因として，「マルクスの階級闘争の教義が，社会生活を根本的に闘争とは無縁であるとみるライヒの傾向とは両立しえないことに，ライヒが最終的に気づいた」ことを指摘している(3)。しかし，こうした解釈では，前期ライヒの精神分析的な政治理論は後期ライヒによって乗り越えられた，という解釈を内包せざるをえない。しかしこれは，ロビンソンの真意ではあるまい。

我々もまた，前期ライヒと後期ライヒとのあいだに大きな相違があることに同意する。しかし両者は，はたして「両立しえない」ものなのだろうか。我々は，そうは考えない。そのことを明らかにするためには，なぜライヒが「政治」を導出し，そして否定していったのか，その「論理」[FO, S. 13, p. 4]を考察していかなければならない。ロビンソンが「ライヒの思考の発達」を強調し「年代順」に整理していることは，ロビンソンの長所であるといえる(4)。しかしロビンソンは，そうした「発達」を論理の展開として解釈してはいないため，何が精神分析の自己運動に内在的であり，何が内在的ではないのか，両者を区別することができないのではないのだろうか。我々は，ロビンソンの整理を参考にしつつも，ライヒがいかに精神分析的な政治理論を構築していったのか，その過程を論理内在的にたどっていくことにしたい。

II　性経済理論

1920年，ライヒは，ジークムント・フロイトが指導するウィーン精神分析協会に入会した。1920年代のライヒは「ブリリアントな治療家」(5)としての名声を博していた。ここでライヒは，自由連想法が必ずしも十分な治療効果をもたらすわけではない，という危機的事態に直面する[FO, S. 92, p. 117]。この危機と対峙していくことが，ライヒの主たる課題であった。ここでライヒの端緒になったのは，初期フロイトの神経症理論である[FO, S. 72ff., pp. 88ff.]。一言でいえば，神経症の原因を幼児期の心的外傷に帰する精神神経

症理論と，現在の性生活の障害に帰する現実神経症理論との二元論，言い換えれば，神経症の原因を過去の心理的障害に帰する精神神経症理論と，現在の生理的障害に帰する現実神経症理論との二元論である。フロイト自身は，こうした二元論を踏まえつつ，その関心を精神神経症に関する諸問題へと移行させていった。その背景には，精神神経症一元論を唱えるシュテーケルの影響があった。しかし同時に，フロイトの関心を精神神経症へと移行させた内在的要因があったこともまた間違いない。それは，現実神経症が「心理療法によって処理できぬものである」[6]という洞察である。このばあい，精神分析家としてのフロイトの関心が現実神経症から離れていったことは，当然のことであったといえるかもしれない。しかしこのことは，フロイトが現実神経症の存在それ自体を否定してしまったことを意味しない[7]。この現実神経症理論を端緒に「オルガスム理論」を構築していったのが，「フロイト以上のフロイト主義者」ライヒにほかならない。

ライヒによれば，神経症の原因は「性器性欲の障害」ないし「性エネルギーの鬱積」である[FO, S. 87ff., pp. 110ff.]。性エネルギーの「蓄積」と「放出」が均衡しているばあい，性経済的に問題はない（「性経済的エネルギー過程」[FO, S. 88, p. 111]）。しかし，性エネルギーの蓄積と放出が均衡していないばあい，性エネルギーの「鬱積」をもたらす。この鬱積した性エネルギーは，エネルギー保存の法則にしたがい，なんらかの放出先をみいださなければならない。それが，神経症のエネルギー源をなすというのである（「障害のある性経済」[FO, S. 88, p. 111]）。このように，ライヒが「性器性欲の障害」というばあい，それは，単なる性行為の障害を意味しているわけではない。このことを明らかにしているのが「オルガスム能力」の概念である（その対概念が「オルガスム不能」である）。ライヒは，オルガスム能力を定義していう。

> 「それは，一切の制止なしに，生物学的エネルギーの流れに身を任せる能力のことである。すなわち，身体の不随意的・快感的な収縮によって，鬱積した性的興奮を放出する能力のことである」[FO, S. 81, p. 102]。

このようにフロイトの現実神経症理論に依拠していったことは，しかし，

ライヒが精神神経症理論を捨象してしまったことを意味しない。たしかにライヒは，現実神経症理論を重視していたといえる[FO, S. 72, p. 88]。しかしライヒは，精神神経症理論を捨象してはいない。というのは，ライヒは，現実神経症と精神神経症との二元論それ自体を退けつつ，両者の相互作用を扱っていったからである。「たしかに，精神神経症は鬱積[＝現実]神経症的核をもっていたし，鬱積[＝現実]神経症は精神神経症的上部構造をもっていた」[FO, S. 73, p. 91]。それゆえ，「現実神経症と精神神経症とは重なりあい，神経症の別々の類型として捉えることはできない」[FO, S. 89-90, p. 113]。ライヒによれば，まず，わずかの「葛藤」(精神神経症的要因)が，性エネルギーの均衡状態を撹乱し，性エネルギーの微量の「鬱積」(現実神経症的要因)をもたらす。この鬱積した性エネルギーは，その葛藤にエネルギーを供給し，葛藤の強化をもたらす。この強化された葛藤は，さらなる鬱積の増加をもたらす。要するに，「心理的葛藤と身体的興奮の鬱積とは，相互に増大させあう」[FO, S. 89, p. 112]。

このように，神経症の原因が性エネルギーの鬱積であるとしたならば，治療の課題は，オルガスム能力を確立し，神経症のエネルギー源を除去することでなければならない[FO, S. 88, p. 112]。しかしこのことは，単に患者に性交を勧めればよいことを意味しない[FO, S. 117, p. 152]。というのは，「満足を体験できないことこそが神経症を特徴づけている」[FO, S. 117, p. 153]からである。それでは，何が性器性欲の満足にたいして「抵抗」しているのであろうか。ライヒによれば，それが「性格」である。

ところで，性格は，単一構造をなすわけではない。それは，性格諸層の有機的連関関係をはらむ，成層構造をなす(ライヒは「鎧の成層」[FO, S. 112, p. 144]を地層の成層構造にたとえている[FO, S. 113, p. 145])。ここで我々は，特に二つのことに注意しなければならない。まず第一に，ライヒが「丁寧」の表層の背後に「嫌悪」[FO, S. 109, p. 141]の深層の存在を洞察していったことである。それは「攻撃性」「サディズム」「破壊性」「死の欲動」などとして捉えられてきたものである[FO, S. 119, p. 154]。第二に，我々は，ライヒがこの「嫌

悪」を一次的＝生物学的欲動として捉えていなかったことに注意しなければならない。ライヒによれば，嫌悪は，フロイトの「死の欲動」理論が仮定したのとは反対に，人間の生物学的欲動＝「一次欲動」なのではない。それは「一次的な生物学的衝動の抑制の二次的所産」[MF, S. 11, p. xi]としての社会生物学的欲動＝「二次欲動」[vgl. FO, S. 16, p. 7]にすぎない。性器性欲が満足させられたばあい，嫌悪は消滅するからである[FO, S. 122, p. 159]。

ライヒの三層の性格構造のモデルは，こうした洞察を総括したものである[FO, S. 175-176, pp. 233-234, MF, S. 11-12, pp. xi-xii]。ライヒによれば，性格構造の最深層＝第三層には「生物学的核」[MF, S. 11, p. xi]がある。「極めて深いこの核においては，有利な社会的諸条件のもとにあるならば，人間は本質的に，正直で勤勉な動物，協調的で愛情のある動物，そして根拠があれば合理的に憎しむ動物である」[MF, S. 11, p. xi]。「この[最]深層においては，自然な社会性と性，仕事の自発的喜び，愛の能力が存在し，作用している」[FO, S. 175-176, p. 233]。このことは，フロイトがエスを「渾沌，沸き立つ興奮に満ちた釜」[8]と捉えたのとは対照的である。

こうした第三層のうえに「第二の・中間の性格層」[MF, S. 11, p. xi]がある。ライヒによれば，この第二層は「残酷でサディスティックな衝動，好色で貪欲な衝動，嫉妬深い衝動」[MF, S. xi, p.11]を含む。要するに，この第二層は「二次欲動」を含む。「ここにおいては，わずかの力をも失うことなしに，サディズム，貪欲，好色，嫉妬，あらゆる種類の倒錯などが封じ込められている。この第二層は，性否定的文化の人工的産物である」[FO, S. 175, p. 233]。

そして，こうした第二層のうえに位置しているのが「性格の表層」[MF, S. 11, p. xi]である。たしかに，この第一層においては「通常の人は，抑制的であり，丁寧であり，共感を覚え，責任感があり，良心的である」[MF, S. 11, p. xi]。しかし，第三層の社会性と比較したばあい，第一層の社会性は「虚偽的・擬似的に社会的」[MF, S. 11, p. xii]であるにすぎない。「人はその表層に，自制，脅迫的・虚偽的丁寧さ，擬似的社会性という人工的仮面をつけている」[FO, S. 175, p. 233]。

それでは，こうした三層の性格構造は，いかなる心理的機能をはたしているのであろうか。ライヒによれば，性格は「外界からの刺激にたいする防衛」[CA, S. 79, p. 48]としての対外的機能をはたしている(「性格抵抗」)。と同時に，「エスから絶え間なく溢れだすリビドーの主人になるための手段」[CA, S. 79, p. 48]としての対内的機能をもはたしている(ただしこのばあい，ライヒが後期フロイトの構造論——エス・自我・超自我——を採用していないことに注意しなければならない)。こうした機能をはたす「性格」は，「鬱積」と「悪循環」[CA, S. 205, p. 159]の関係にある。すなわち，鬱積した性エネルギーが，性格のエネルギー源になっていると同時に，性格が性器性欲の満足を阻害し，性エネルギーの鬱積を生みだしているというのである。その意味において，それは一種の「鎧」にたとえることができる。それゆえ，神経症患者を治療するためには，この「性格の鎧」を解体し，悪循環の構造を除去する作業がおこなわれなければならない。それが「性格分析」である。

ここでライヒは，二つの「理念型」を導入する[FO, S. 129ff., pp. 169ff.]。「神経症的性格」と「性器的性格」とである。「神経症的性格」は，性エネルギーの蓄積・放出の不均衡状態のうえに成立し，その不均衡状態を再生産する性格のことである。そこにおいては，義務としての「道徳」が，性エネルギーの放出を妨げている(「道徳的規制」)。これにたいして「性器的性格」は，性エネルギーの蓄積・放出の均衡状態のうえに成立し，その均衡状態を再生産する性格のことである。そこにおいては，性エネルギーの放出にたいして，道徳的規制が課せられてはいない(「性経済的自己規制」)。

こうした理念型にしたがえば，性格分析の課題は「神経症的性格を性器的性格に転換すること，道徳的規制を性経済的自己規制に置換すること」[FO, S. 139-140, p. 183]である。しかしこのことは，それほど容易なことではない。「それにたいして全公認世界が闘いを挑んできた」[FO, S. 142, p. 186]からである。障害は「心的にと同様に社会的にも錨をおろしていた(verankert)」[FO, S. 96, p. 123]のである。神経症患者の治療を課題としていたライヒが，精神分析的な政治理論を構築していかなければならなかったのは，このため

にほかならない[9]。

しかしこのことは，決して容易な作業だったわけではない。ライヒのまえには，フロイトの「文化哲学」が立ちはだかったのである[FO, S. 157, p. 207][10]。ライヒが異議を唱えるのは，フロイトの「昇華」「断念」理論にたいしてである[FO, S. 156, p. 205, S. 163, p. 215]。フロイトの理論は，一言でいえば，欲動の「昇華」あるいは「断念」こそが「文化」の前提条件をなすというものである[11]。しかしライヒは，そうは考えない。「性的に満足した人は，文化的意味において，さらに生産的である」[FO, S. 168, p. 223]。それゆえ，性抑圧が「文化」それ自体を支えているとすることはできない[MF, S. 48, p. 29]。

ライヒはまた，フロイトの「死の欲動」理論にたいしても異議を唱える[FO, S. 156, p. 205]。フロイトによれば，死の欲動が文化を崩壊の危機に曝す。それゆえ，文化を維持するためには，死の欲動それ自体を抑制しなければならない。と同時に，性生活に制限を加え，男女間のリビドー充足を抑制し，その一部を「共同体の絆を友情関係によって強化す」[12]るために転用しなければならない。しかし，ライヒによれば，「死の欲動」は「一次欲動」ではなく，性抑圧の所産としての「二次欲動」にすぎない。それゆえ，「死の欲動」と対峙するためには，フロイトとは逆に，性解放こそがおこなわれなければならない[FO, S. 170, p. 226]。

しかし，ここで疑問が起こるかもしれない。それでは，性抑圧はいかなる社会的機能をはたしているのであろうか，と。ライヒによれば，性抑圧の主たる社会的機能は，一言でいえば，「権威主義的秩序に適応する，従順な臣民を生産すること」[MF, S. 49, p. 30]である。牛馬にたいする去勢が，進んで牽引をおこなう動物を生みだすように，人間にたいする性抑圧は，権威にたいして従順な人間を生みだすというのである[FO, S. 169, p. 224]。その意味において，性抑圧の社会的機能は「精神的去勢」[FO, S. 169, p. 224]をおこなうことである。

こうした社会的機能をはたしているのが，家族・学校・教会といった国家装置である。とりわけライヒが重視したのが，権威主義家族である。ここで

ライヒの関心は，フロイトとは違い，家族の社会的機能にあったといえる（フロイトの関心が「家族のなかの個人」[03]にあったとするならば，ライヒの関心は「社会のなかの家族」にあったとすることができるかもしれない）。ライヒは，家族を「小型の権威主義国家」[MF, S. 49, p. 30]ないし「権威主義的社会システムを再生産するための最も重要な場所」[MF, S. 49, p. 30]として捉えたのである。

「我々は，それを反動の生殖細胞の中心——反動的・保守的人間を生産するための最も重要な場所——とみなさなければならない。それは，特定の社会過程から発生・発展し，権威主義システムを維持するための最も重要な制度になったのである」[MF, S. 108, pp. 104-105]。

このように，性抑圧＝神経症が構造的なものであるからには，個々の神経症患者を「治療」することにとどまることはできない。それを「予防」することへと進まなければならない[FO, S. 149-150, p. 197]。しかも，それが権威主義社会の要請であるからには，権威主義社会の構造それ自体を変革していかなければならない。ライヒがマルクス主義に接近し，精神分析的な政治理論を構築していったのは，こうした文脈においてにほかならない。たしかに，ライヒの政治化は，オーストリア政府が労働者のデモ隊に発砲した，1927年7月15日の政治的事件を直接の契機としていたといえるかもしれない。しかし我々は，そうした実践的要因の背景に，精神分析の自己運動に内在的な要因があったことを見落としてはならない。

III　ファシズムの大衆心理

1930年，ライヒは，革命と反革命との死闘が繰り広げられるベルリンに移住した。ここでライヒは，ファシズムという未曾有の非合理的現象に直面し，古典的名著『ファシズムの大衆心理』(1933年)を著す。それは，しばしば指摘されるように，明快な著作であるとはいいがたい[04]。しかしそれは，家族の政治的機能，イデオロギー，プロパガンダ，シンボル操作といった現代政治の諸問題を含んでおり，その意味において，政治理論の宝庫であると

いっても過言ではない。ここで我々は，そうした諸問題を個別的にたどっていく余裕はない。我々は，政治理論にたいするライヒの最大の貢献であろう，ファシズムの大衆心理学的な視座を考察するにとどめたい。

ライヒが共産党員であったことからも想像がつくように，『ファシズムの大衆心理』の背景にあったのは，マルクス主義のファシズム理論であった。その社会＝経済学的説明にしたがえば，世界恐慌は，労働者階級のあいだに「階級意識」の成長をもたらし，革命状況を到来せしめるはずであった。しかし，起こったのは「革命」ではなく，「超政治的反動」[MF, S. 33, p. 10]としてのファシズムであった。こうした事態こそは，ライヒにたいしてマルクス主義への再検討を迫るものであった。しかしこのことは，ライヒがマルクスを全面的に放棄する道を選択したことを意味しない。ライヒがおこなったのは，「新しい歴史的現象を捉えるために弁証法的唯物論を駆使しなかった」[MF, S. 29, p. 6]「俗流マルクス主義」を克服することであった。彼らがファシズムに敗北したのは「まったく新しい現象である20世紀のファシズムを，19世紀に属する諸概念で捉えようとした」[MF, S. 21, p. xxi]からなのである。

周知のように，マルクス＝エンゲルスは「意識」が「社会的存在」によって規定されていることを明らかにした。しかしこのばあい，両者の「乖離」という事態を特に問題にしていたわけではない。ライヒによれば，このことは，まず第一に，マルクス＝エンゲルスが心理学者ではなかったこと，第二に，自然科学的心理学が存在していなかったことに起因している[MF, S. 45, p. 25]。これにたいして，第一次世界大戦前後における二つの危機的事態――第二インターナショナルの崩壊と「世界革命」の挫折――を背景に，この乖離の問題と格闘していったのが，グラムシ，ルカーチといった「西欧マルクス主義者」である[09]。ライヒも，その一人にほかならない。

ライヒによれば，この問題は，指導者の問題としてではなく，大衆の問題として捉えられなければならない。たしかに，指導者の側における要因，たとえば「社会民主党指導部の変節」[MF, S. 42, p. 22]があったことは間違いない。しかし，それだけでは事態の片面を説明したことにしかならない。もう

一つの側面，すなわち，大衆の側における要因を問題にしなければならない。このようにして，ライヒが問題にするのは，社会民主党指導部の変節それ自体ではない。「なぜ，自由を愛する反帝国主義的な無数の労働者大衆が，裏切られることを許したのか」[MF, S. 42, p. 22]。

この問題は，第二に，社会＝経済学的にではなく，心理学的に説明されなければならない。すなわち，指導者から大衆への視座転換にともない，社会＝経済学的説明から心理学的説明への視座転換がおこなわれなければならない。というのは，大衆の問題として捉えたばあい，社会＝経済学的説明では，自己の経済的利害に反する大衆の思考・行為にたいして，説明を加えることはできないからである。ここに成立するが「大衆心理学」にほかならない。

> 「反動が特定の思想宣伝によって成功を収めたばあい，それは単に[大衆が]だまされたということではありえない。いかなるばあいにおいても，大衆心理の問題が横たわっているに違いない。我々がまだ把握していない何かが，大衆のなかに起こっているに違いない。そしてそれこそが，彼ら自身の死活的利害に反して思考・行為することを可能にしているのである。この問題は決定的である。というのは，大衆のこの態度がなければ，政治的反動は完全に無力であろう。これらの思想を吸収する大衆の用意――独裁の『大衆心理的土壌』とよばれるもの――だけが，ファシズムの強さをなす」[MF, S. 117, p. 115]。

しかしこのことは，ライヒが社会＝経済学的説明を捨象してしまったことを意味しない。ライヒは，社会＝経済学的説明が有効性を発揮する，一定の条件を与えたにすぎない。その条件とは，一言でいえば，大衆の合理性である。ここで合理性の概念は「利害関係を基準にした理性の概念」であり，「利益を実現する傾向にある行為が合理的である」[09]。ここに，ライヒの方法は，社会＝経済学的説明と心理学的説明との二元論を生みだす。すなわち，合理的現象にたいしては社会＝経済学的説明をおこない，非合理的現象にたいしては心理学的説明をおこなわなければならない。たとえば，労働者が搾取に

反対し，ストライキをおこなったばあい，それは労働者の利害に合致している。このばあい，社会＝経済学的説明をおこなえばよい。ここでは，心理学的説明をおこなってはならない。これにたいして，労働者が搾取されているにもかかわらず，ストライキをおこなわないばあい，それは労働者の利害に合致してはいない。このばあい，社会＝経済学的説明をおこなうことはできない。ここでは，心理学的説明をおこなわなければならない[MF, S. 40, p. 19]。

このように，合理的現象にたいする社会＝経済学的説明と，非合理的現象にたいする心理学的説明との二元論こそが，ライヒの方法の核心をなすものである。しかし，こうした二元論には，一つの難問がはらまれてはいないだろうか。それは，ヴォルフェンシュタインが指摘しているように[07]，合理的現象と非合理的現象を峻別することがそれほど容易なことではない，ということである。しかし，ライヒのファシズム理論に関していえば，こうした難問を突きつけることはできない。というのは，ライヒは，ファシズムが非合理的現象であると判断したがゆえに，ファシズムの心理学的説明をおこなっていったわけではないからである。ライヒが心理学的説明をおこなっていったのは，社会＝経済学的説明ではファシズムを説明できなかったからなのである。ここに，ファシズムの心理学的説明をおこなう必然性があったといわなければならない。

それでは，ライヒは，いかなる心理学的説明をおこなっていったのであろうか。ここでライヒは「社会的性格」の概念こそ用いていないものの，エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』(1941年)にさきがけて，大衆の性格構造からファシズムを説明している。しかしここで，ライヒは大衆の性格構造ではなく下層中産階級の性格構造を問題にしていたのではないのか，という疑問が起こるかもしれない。たしかに，ライヒは『ファシズムの大衆心理』第二章において，ファシズムの担い手が下層中産階級であること，そしてそのことが下層中産階級に特有な条件に起因していることを指摘している。その条件とは，一つには，下層中産階級の家族が小規模の経営体である

ため，家族の束縛が強いことであり[MF, S. 63-64, p. 48]，もう一つには，下層中産階級が肉体労働者階級から自己を区別するため，支配階級の性道徳を受けいれていることである[MF, S. 66-67, pp. 51-52]。しかし，第三版序文(1942年)には，こうした下層中産階級への言及はない。それどころか，「性格には階級間の境界はない」[MF, S. 24, p. xxiv]とさえ言っている。たしかに，ライヒは下層中産階級に固有の条件を否定してはいないのかもしれない。しかし，ここでライヒが「階級」を社会＝経済学的にではなく心理学的に問題にしていることを考えるならば，我々は，ライヒが「大衆」内部の相違を問題にしていると解釈したほうがよいのかもしれない。

すでにみたように，ライヒは，大衆の性格構造を，擬似的社会性の第一層，二次欲動の第二層，自然的社会性の第三層という三層構造として捉えていった。ライヒの政治理論の独創は，政治的・イデオロギー的配置をこうした三層の性格構造に対応させていることである[MF, S. 12, p. xii]。そして，ファシズムを通常の「系統だった「政治理念」を唱える「政党」」[MF, S. 13, p. xiii]と同列に論じていないことである。ライヒによれば，大衆の性格構造の第一層には，自由主義が対応している。それは，第三層の自然的社会性とは疎遠な関係にあるし，また第二層の二次欲動とは抑圧・被抑圧の関係にある。これにたいして，第三層に対応しているのが「真に革命的なもの」[MF, S. 12, p. xiii]である。しかしそれは，大衆的基盤を獲得してはいない。そして，大衆の性格構造の第二層に対応しているのが，ファシズムである[MF, S. 12-13, p. xiii]。ライヒは，ファシズムがサディズム的であることを指摘しているが[Vgl. MF, S. 14-15, p. xv]，それは，このためにほかならない。自由主義は，こうした「人間の性格倒錯」を「倫理的規範」によって克服しようとした[MF, S. 12, p. xii]。しかし，20世紀の歴史は，そうした方策が不可能であることをしめしている。第一次世界大戦後，二次欲動の第二層が噴出していったのである[FO, S. 176-177, pp. 234-235]。

「「ファシズム」は，平均的人間の性格構造の系統だった政治的表出である。……性格の観点からするならば，「ファシズム」は，機械文明にお

いて権威主義的に抑圧された人間の基本的情緒的態度である。そして，生の機械論的・神秘主義的解釈である。／我々の時代の人間の機械論的・神秘主義的性格がファシスト党を生みだしたのであって，その反対ではない」[MF, S. 13, p. xiii]。

このように，ファシズムは「大衆的人間の非合理的[性格]構造の表出」[MF, S. 20, p. xx]である。たしかに，ヒトラーは，その「人種理論」のイデオロギーやプロパガンダによって「大衆」の「感情」を「操作」していったといえるかもしれない。しかし，そうしたイデオロギーやプロパガンダが大衆の心をつかんだのは，それが大衆の性格構造に心理的に合致していたかぎりにおいてなのである[MF, S. 53, p. 35]。そしてそれは，「大衆に支持・擁護されている」[MF, S. 13, p. xiv]ために，単なる「政治的反動」とは異なっている。このことが「軍国主義」との違いである。「我々は，通常の軍国主義とファシズムとを厳密に区別しなければならない。ヴィルヘルム体制のドイツは軍国主義的ではあったが，ファシズム的ではなかった」[MF, S. 13-14, p. xiv]。

このように，ファシズムが「一握りの反動的徒党の独裁」[MF, S. 13, p. xiii]ではないとするならば，我々は，ファシズムを「純粋に反動的な運動」[MF, S. 14, p. xiv]であるとすることはできない。ライヒによれば，ファシズムは，大衆の性格構造の矛盾を反映し，反動的であると同時に「革命的」なものである。ただし，革命的を「根源的」とするならば，ファシズムを革命的なものであるとすることはできない。それはむしろ「反抗的」なものであるといったほうがよい[MF, S. 14, p. xiv]。このようにして，ライヒによれば，ファシズムは「反抗的感情と反動的社会理念との合成物」[MF, S. 14, p. xiv]である。しかしここで，ファシズムの「反抗的感情」とは，具体的にはいかなることを意味しているのであろうか。ライヒは，このことを具体的に説明してはいない。しかしここで我々は，この命題を，ファシズムが「オルガスム願望」[MF, S. 20, p. xxi]であるという命題と結びつけて解釈することはできないだろうか。さらに，それを以下の叙述と結びつけて解釈することはできないだろうか。

「信仰・神秘主義の方法を利用している，それゆえ，性的・リビドー的

方法を利用しているファシストに出会ったばあい，彼は，その関心を完全にファシストに向けてしまう。それは，ファシストの綱領がリベラルの綱領よりも強い印象を与えたからではない。フューラーとそのイデオロギーに献身するばあい，絶え間のない内的緊張の，つかの間の軽減を体験するからにほかならない。というのは，彼はその葛藤を無意識的に別の形態にし，解決することができたからである。……なぜファシズムのエロティックな形態が，……一種の満足——もちろん偽りのものではあるが——を与えるのかは，心理学者でなくても把握できるに違いない」[MF, S. 187-188, p. 202]

このように，ファシズムが大衆の性格構造の表出であり，その意味において「革命的」なものであるとしたならば，ファシズムの勝利は，決定的なものであったに違いない。しかしこのことは，ライヒがファシズムとの闘いに絶望したことを意味しない。ライヒによれば，大衆の神経症的性格とファシズムとは，権威主義社会における性抑圧の二次的所産にすぎない。それゆえ，適切な処方箋さえ与えるならば，不可避のものではない[MF, S. 201, pp. 218-219]。このようにして処方箋は，究極的には一つのこと以外にはありえない。「大衆の自然な性の解放と社会的保護」[FO, S. 186, p.248]である。しかしそれは，性抑圧を支える権威主義的な社会構造の変革と切り離すことはできない。性革命は同時に，社会革命でもなければならない。

しかしここで我々は，一つの壁にぶつからざるをえない。ライヒは『ファシズムの大衆心理』第三版において，一切の「政治」を退けていったようにみえるからである[08]。ライヒが「一切の政治を終わらせよ」というばあい，たしかに，前期ライヒの精神分析的な政治理論とは「両立しえない」ようにみえるかもしれない。そしてそこに，「政治家」が「大衆」を「操作」することにたいする先駆的な批判が含まれていることは間違いない。その意味において，我々は，後期ライヒの「反政治」[09]固有の意義を否定することはできない。しかしここで我々は，前期ライヒと後期ライヒが「両立しえない」と解釈する必要はない。

ここで我々は，後期ライヒが「政治」を退けていったのは，あるいは少なくともそのようにみえるのはなぜなのか，このことを問わなければならない。ここで我々は，こうした「思考上の革命」[MF, S. 18, p. xviii]の背景に，ライヒ自身の強烈なスターリニズム体験があったことに気づくに違いない[MF, S. 18-20, pp. xix-xx]。共産党官僚は，ライヒの著作を「反革命的」であるとし，ライヒをドイツ共産党から除名したのである。後期ライヒの「政治」にたいする否定的態度は，この体験を抜きにしては考えられない。しかしこのことは，「政治」を導出していった精神分析の自己運動にとっては外在的な要因であり，前期ライヒの精神分析的な政治理論を否定することにはならない。それゆえ，『ファシズムの大衆心理』第三版のなかに，抑圧的な社会構造を変革する「実践」を否定しない叙述があることは，何ら驚くに値しない。

> 「新旧いずれの政党にも，社会的諸関係の事実的・合理的な新秩序をもたらすことができると期待することはできない。それゆえ必要なのは，事情が許すやいなや，あらゆる生命に不可欠な労働部門の代表者――最も卓越し，最も思慮深い，しかし政治的ではない――が，個人生活・社会生活の実践的課題――こうした代表者の手にまかせられている――を労働民主主義的な協同において討論し解決するために，一国的・国際的な会議を開くことである。こうした非政治的で厳密に実践的な労働会議が機能しはじめるならば，事態は，客観的・合理的な労働の論理一貫性にしたがって，おのずから発展するであろう」[MF, S. 276, p. 310]。

このようにライヒは，社会構造を変革する「実践」を退けてはいない。我々は，後期ライヒが「政治」を退け「労働民主主義」を提唱していったことを，このようなものとして解釈しなければならない。ここで我々は，「労働民主主義」が同時に「労働民主主義」でもあることを忘れてはならない。

Ⅳ　結論

我々は，ライヒの論理に内在しつつ，精神分析的な政治理論の誕生の過程をたどってきた。そこで明らかになったことは，ライヒが「政治」を導出して

いったのは，神経症という個人病理，ファシズムという政治病理を噴出せざるをえない，性抑圧的な権威主義社会の構造を変革するためだった，ということである。そしてそれは，我々がたどってきたように，精神分析の自己運動の「必然」であったといえる。他方，我々は，ライヒがファシズムという政治的非合理主義を解明するために，政治理論の側から精神分析を要請していった論理も明らかにしてきた。ここに我々は，精神分析と政治理論との内的連関，しかも二面的な内的連関をみいだすことができるに違いない。そしてそのことは，すでにみたように，「非政治的」ではあっても「非実践的」ではない，後期ライヒにおいても変わりはない。それゆえ我々は，ロビンソンのように，前期ライヒと後期ライヒとが「両立しえない」と解釈する必要はない。その意味において，我々がライヒの精神分析的な政治理論について語ることは，依然として許されるに違いない。

しかしこのことは，ライヒの精神分析的な政治理論に問題がないことを意味しない。ここで我々は，エーリッヒ・フロムの指摘を想い起こすことができるかもしれない。

> 「性解放——その最も有能なスポークスマンはライヒであるが——は，消費社会のあらゆる集団において，驚くべきスピードで起こっている。しかし，ライヒが考えたような政治的帰結は伴ってはいない。／重要な問題は，性的経験の質を理解することである。性的満足は大部分，消費の一品目になり，その他のあらゆる現代的な消費の特徴をもっている。すなわち，倦怠，隠れた抑鬱，不安に動機づけられており，満足の行為それ自体は皮相なもの，表面的なものなのである」[20]。

こうしたフロムの批判には，かなりの説得力があるように思われる。そうであるとしたならば，我々は，ライヒの精神分析的な政治理論を継承するだけでなく，その限界を乗り越えていかなければならない。エーリッヒ・フロムの精神分析的な政治理論が浮上してくるのは，ここにおいてにほかならない。しかしそれについては，稿を改めることにしたい。

主要テクスト

主要テクストは，以下の三著である。引用の頁数は，略号を用い，本文中にしめす。S. は独語版の頁数，p. は英語版の頁数である。なお，三著とも邦訳がある。

『オルガスムの機能』[FO]

Die Funktion des Orgasmus: Sexualökonomische Grundprobleme der biologischen Energie (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1987).

The Function of the Orgasm: Sex-economic Problems of Biological Energy, trans. Vincent R. Carfagno (New York: The Noonday Press, 1973).

『ファシズムの大衆心理』[MF]

Die Massenpsychologie des Faschismus (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1986).

The Mass Psychology of Fascism, trans. Vincent R. Carfagno (New York: The Noonday Press, 1970).

『性格分析』[CA]

Charakteranalyse (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1989).

Character Analysis, trans. Vincent R. Carfagno (New York: The Noonday Press, 1972).

注

(1) 日本におけるライヒ研究史については，村本詔司「日本でのウィルヘルム・ライヒ——科学と治療とイデオロギー」(『バイオエネルギー・ジャーナル』第3号，1984年9月)を参照せよ。

(2) ライヒの生涯は，マイロン・シャラフの伝記に詳しい。

Myron Sharaf, *Fury on Earth: A Biography of Wilhelm Reich* (London: Andre Deutsch, 1983).

マイロン・シャラフ『ウィルヘルム・ライヒ——生涯と業績』上下，村本詔司・国永史子訳(新水社，1996年)。

(3) Paul Robinson, *The Freudian Left: Wilhelm Reich, Gesa Roheim, Herbert Marcuse,* With a New Preface by the Author (Ithaca and London: Cornell University Press, 1990), pp. 57-59.

ポール・ロビンソン『フロイト左派——ライヒ・ローハイム・マルクーゼ』平田武靖訳(せりか書房，1983年)，65-67頁。

(4) *Ibid.*, p. 10, 22頁.

(5) *Ibid.*, p. 13, 25頁.

(6) フロイト「『不安神経症』という特定症状群を神経衰弱から分離する理由について」(『改訂版フロイド選集第10巻　不安の問題』所収，加藤正明訳，日本教文社，1969年)，11頁。

(7) フロイト『自己を語る』(『フロイト著作集第4巻　日常生活の精神病理学他』所収，懸田克躬訳，人文書院，1970年)，438頁。

(8) フロイト『精神分析入門(続)』(『フロイト著作集第1巻　精神分析入門(正・続)』所収，懸田克躬・高橋義孝訳，人文書院，1971年)，447頁。

(9) その意味において，ライヒは「新フロイト主義者」の先駆者である。Cf. J. A. C. Brown, *Freud and the Post-Freudian* (London: Penguin Books, 1964), p. 101.

(10) ライヒとフロイトとの対立については，徳永恂「ライヒ vs. フロイト——離反の理論的基礎をめぐって」(『【岩波講座】現代思想3　無意識の発見』岩波書店，1993年)がある。

(11) フロイト『文化への不満』(『フロイト著作集第3巻　文化・芸術論』所収，浜川祥枝訳，人文書院，1969年)，458頁，463頁。

(12) 同上書，467頁。

(13) H. Stuart Hughes, *Consciousness and Society: The Reorientation of European Social Thought 1890-1930* (New York: Alfred A. Knope, 1958), p. 144.

ヒューズ『意識と社会——ヨーロッパ社会思想　1890-1930』生松敬三・荒川幾男訳(みすず書房，1970年)，99頁。

(14) 曽良中清司は『権威主義的人間——現代人の心にひそむファシズム』(有斐閣，1983年)において，「性的抑圧と政治的反動のつながり」に二つの側面があることを指摘している。一つは，性的抑圧から「自由や解放を恐れ回避し，伝統や権威を無批判に受け入れるような，保守的・反動的態度が生まれる」側面であり，もう一つは，「抑圧のために自然な欲求充足の道から閉め出された性欲は，たとえばサディズムのような別種の欲求に転化して代替充足をえようとする」側面である。そして，前者を「性的抑圧から政治的反動にいたるいわば幹線」であり，後者を「それを補足する支線」であると解釈している。こうした曽良中の整理は，『ファシズムの大衆心理』の本文に即したばあい，決して間違いではない。しかし，本文に依拠したのでは，なぜ「革命」でなく「政治的反動」なのか，ということは説明しえても，なぜファシズムという「政治的反動」なのか，ということは説明しえないのではない

のか。その他の政治的反動とは異なったファシズム独自の性質について明らかにするためには，『ファシズムの大衆心理』第三版序文と，『オルガスムの機能』の「ファシズム的非合理主義」の節を中心に，『ファシズムの大衆心理』本文をいわば「脚注」として解釈していったほうがよいのではないのか。

(15) Roger S. Gottlieb, ed., *An Anthology of Western Marxism* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1989), pp. 4-5.

(16) Eugene Victor Wolfenstein, *Psychoanalytic-Marxism Groundwork* (London: Free Association Books, 1993), p. 59.

(17) *Ibid.*, p. 60.

(18) ライヒの「政治」批判は，1937年7月26日付の文書に出てくる。 Cf. Wilhelm Reich, *Beyond Psychology: Letters and Journals 1934-1939*, ed. and introd. Mary Boyd Higgins, trans. Derek and Inge Jordan and Philip Schmitz (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1994).

(19) Vgl. Bernd A. Laska, *Wilhelm Reich* (Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1981), S.66.

(20) Erich Fromm, *The Revision of Psychoanalysis*, ed. Rainer Funk (Boulder, San Francisco and Oxford: Westview Press, 1992), p. 35.

Psychoanalysis and Political Theory:
Political Theory of Wilhelm Reich

〈Summary〉

Seiki Okazaki

In this paper I would like to consider the *political* theory of Wilhelm Reich (1897-1957). Although his political theory is rarely taken up, it includes a crucial insight into political irrationalism. Therefore, it is worth while to look into his political theory. However, there is a difficulty involved in analyzing it, simply because after the mid-1930s, Reich came to reject "politics." If we can not explain this change successfully, it follows that the interpretation may prevail as valid: the political theory of the early Reich was just a "deviation." Although Paul Robinson's *Freudian Left* (1969) is a fine book, it does not explain this change persuasively. In order to explain it in a compelling manner, we have to understand the *logic,* Reich both defended and rejected "politics." By so doing, we can distinguish what is inherent in the *Selbstbewegung* of psychoanalysis from what is not. In this paper, I will argue that the later Reich is not "incompatible" (Robinson) with the early Reich and that there is an *inner* relationship between psychoanalysis and political theory.